

児童生徒の発達を支えるカウンセリングの実践に向けて

ースーパービジョンの視点とその活用ー

一貫連携教育研究所所長
心理学部教授 三川 俊樹

はじめに

現行の学習指導要領（平成 29 年告示）にカウンセリングという用語が初めて登場してから 8 年が経過しようとしている。児童生徒の発達の支援のためには、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方が必要であるという観点があらためて強調され、教育実践においては、集団の場面におけるガイダンス（指導）と、一人一人が抱える課題に個別に対応したカウンセリング（相談）を相互に関連させながら活用することが求められてきた。

また、12 年ぶりに改訂された『生徒指導提要』（改訂版）も、2022 年 12 月の公表から 2 年が経過した。『生徒指導提要』（改訂版）では、生徒指導を「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」と定義し、生徒指導の目的を「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」と明記して、児童生徒の成長を促す積極的な生徒指導（発達支持的生徒指導および課題未然防止教育）が強調されたほか、「ガイダンスとカウンセリングは、教員、SC、SSW 等が協働して行う生徒指導において、児童生徒の行動や意識の変容を促し、一人一人の発達を支える働きかけの両輪」と述べている。

キャリア教育におけるカウンセリングは、すでに三川（2022）が論じたように、児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援するためのキャリア・カウンセリングは、外部の専門人材が担う活動ではなく、日々児童生徒に接している教職員がカウンセリングに関する知識やスキルに加えて、カウンセリングの基盤となるコミュニケーションの方法を習得して実践する活動であり、教師と児童生徒との日常的な人間関係の上に成り立つ適切なコミュニケーション（対話）である。また、現行の学習指導要領の特別活動の内容に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」が位置づけられ、その指導に当たっては、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行う

こと。その際、生徒が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」としてキャリア・パスポートの導入が示唆された。そして、キャリア・パスポートの記述や自己評価の指導にあたっては教師が対話的に関わることを求められたほか、キャリア・パスポートを活用してカウンセリングを行うなど、児童生徒理解や一人一人のキャリア形成に努めることが指導上の留意点として指摘された。とくに、児童生徒が自らの体験を振り返り、それに気づき（意識化）、その内容を自分の言葉で表現し（言語化）、他の人が聞いてわかるように伝達したり、読んでわかる文章にして記述するプロセスを促進するために、キャリア・カウンセリングの充実が大いに期待されている。

1 カウンセリングの実践者としての教師

カウンセリングの実践者（カウンセラー）は、安定した人間関係を基礎に、主に言語的コミュニケーションを通して心理支援および発達支援を行う専門職として、成長と適応という個人の積極的側面に強調点を置き、発達の的に支援する方向で実践にあたるとともに、人々が個人的・社会的スキルを身につけたり改善すること、さまざまな問題に対する適応力や環境に対処するためのスキルを向上させ、問題解決や意思決定に必要な能力を発達させることができるように援助する（三川，2022）。また、個人が主体的に問題解決や意思決定を図ることができるようにするために、指示や助言を一方的に与えたり、問題解決の方策や意思決定の方向性を教示するよりも、積極的傾聴や受容的態度、共感的理解を基本にしてかわることが強調される（三川，2022）。

教師も、児童生徒との安定した人間関係を基礎に、主に言語的コミュニケーションを通して児童生徒の心理支援および発達支援を行う専門職として、現行の学習指導要領に明記された「一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリング」、生徒指導提要（改定版）に示された「一人一人の発達を支える働きかけ」のほか、児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援するためのキャリア・カウンセリングを担っている。

しかしながら、日本の学校教育においては、カウンセリングはスクールカウンセラーなどの心理の専門職によって行われるもので、教師の役割や活動ではないと考えられていることが少なくない。たとえば、「教師はカウンセラーではないから、カウンセリングはしない」とか、「教師はカウンセリングを学んでいない」「教師にはカウンセラーの資格がないから、カウンセリングをしてはいけない」とか、極端な場合には「子どもの話をただ聞いているだけでは、教育にならない！」などと、カウンセリングそのものが敬遠されていることすらある（三川，2022）。

学校心理学では、カウンセリングは人間と人間の関わりを通じた援助活動であると考え、カウンセリングの定義に「狭義」「やや広義」「広義」の3つを区別する（石隈，1999）。カウンセリングは、狭義には「カウンセラーあるいはそれに準じる専門家による問題解決の援助をめざした面接である」とするが、やや広義には「教師やカウンセラーによる、子どもへの直接的な援助的かわりである」と定義しており、教師が子どもへのカウンセリングの担い手であることが明確に示されて

いる。なお、広義には「子どもが学校生活を通して、人間として発達し、児童生徒として教育を受けながら、さまざまな課題に取り組む過程で出会う問題状況や危機状況の解決を援助し、子どもの成長と発達を促進する援助サービスである」としており、学校心理学の心理教育的援助サービスとほぼ同義になる（石隈，1999）。

日本におけるキャリア教育の推進にあたっては、児童生徒一人ひとりに対するきめ細かな指導・援助を行うキャリア・カウンセリングの充実が極めて重要であり、基本的なキャリア・カウンセリングについてはすべての教員が行うことができるようになることを目標に、その機会の確保と質の向上に努めることが求められてきた。筆者はキャリア教育の指導者養成研修等において「児童生徒の発達を促すキャリア・カウンセリングの基盤としてのコミュニケーションスキルの向上」を図るためのワークショップを担当する中で、受講者の理解を図るための資料を作成し、その概要を『一貫連携教育研究所紀要』の第8号に掲載した（三川，2022）。

本論考では、教師による子どもへの直接的な援助的関わりとして活用されるカウンセリングの能力や技能の向上のために最も重要な役割を果たしているスーパービジョンの視点を提供し、教師がカウンセリングの実践においてスーパービジョンを活用することの意義について検討したい。

2 カウンセリングのスーパービジョン

筆者は、一般社団法人日本学校心理士会 2024 年度大会の研修会において、学校心理士の有資格者を対象にした研修会「カウンセリングにおけるスーパービジョンの活用」（オンデマンド配信；2024 年 10 月 27 日～11 月 5 日）を担当した。事前に研修会の概要として、生徒指導や教育相談、キャリア教育の実践において、教師による子どもへの直接的な援助的関わりとして活用されるカウンセリングは、その能力や技能の向上のためにスーパービジョンが最も重要な役割を果たしているにもかかわらず、スーパービジョンにはさまざまな誤解や混乱が生じており、「スーパービジョンの意義・目的・方法がわからない」「スーパービジョンには抵抗がある」という意見のほか、事例検討やケースカンファレンス、コンサルテーションとの区別もつかないままに、指導や助言が行われてきたという現状を指摘した上で、カウンセリングの基礎訓練に適用され、特定の学派や理論によらない「基礎的で汎用性のある」スーパービジョンの理解とそのすすめ方について紹介する旨を掲示した。

なお、カウンセリングの基礎訓練の過程で必要となる特定の学派や理論に拠らないスーパービジョン、すなわち汎用性のあるスーパービジョン・モデルとは、一般社団法人日本キャリア・カウンセリング学会（旧：日本産業カウンセリング学会）の「スーパーバイザー養成講座」に向けて構築されたものであり、基礎的で汎用性のあるスーパービジョンが提供できるスーパーバイザーの養成訓練とスーパービジョンの指導者（スーパービジョンメンター）の養成訓練について、2009 年 2 月から継続的な取り組みを重ねてきたものである。

3 スーパービジョンの発展の経緯とスーパービジョンをめぐる誤解や混乱

日本学校心理士会 2024 年度大会の研修会では、スーパービジョンの発展の経緯と、スーパービジョンをめぐる誤解や混乱について解説することからスタートした。平木 (2017) によれば、北米では 1960 年代にはスクールカウンセラーなどの資格認定と大学院における教育・訓練が開始され、特定の心理療法理論によらない汎用性のあるカウンセラーの基礎訓練が着々と進められたが、1970 年代にはスーパービジョン独自のモデルの必要性が唱えられ、その理論体系を構築する試みが始められたとされる。さらに、1980 年代になるといくつかの理論横断的なスーパービジョン・モデルが開発されたほか、1990 年代には特定の学派や心理療法の理論・技能の習得のためだけではなくスーパービジョン・モデルが追及され、訓練生の発達に応じたスーパービジョン・モデルやスーパービジョンに共通する課題や機能を理論化したモデルが提示されるようになった (平木, 2017)。

それに対して、日本の心理臨床の分野においては、スーパービジョンを受けた経験はあっても、それはある学派の理論モデルに基づいたものであり、その学派の専門職を育成する上では有効であっても、大学院の実践教育や初学者の訓練に適用するには限界があることが指摘されてきた (平木, 2017)。例えば、「多くの心理臨床職の養成訓練をしている大学院では、いまだにアメリカで工夫されてきたようなスーパーヴィジョンの訓練を受けたことがない指導者が、スーパーヴィジョンを実施している。その前提には、スーパーヴィジョンを受けた経験、あるいは臨床実践経験があればスーパーヴィジョンができるといった思い込みがあったと思われる」という指摘のほか、「日本の大学における心理臨床スーパーヴィジョンの現実、自身の理論モデルにこだわり、理論モデルによるスーパーヴィジョンしかないことを公言して、基礎訓練をしなかったり、指導法に馴染まない訓練生に対して無関心であったり、脅威を与えたりして、訓練が十分に行き届かない指導者のケースに出会うことは多い」という状況や、「訓練生に対するスーパーヴィジョンと現場のセラピストに対するスーパーヴィジョンは異なることに配慮を欠き、さらに、スーパーヴィジョン、カウンセリング、コンサルテーションの区別が不明確なまま実践指導をしている」という実態があるとされた (平木, 2017)。

このように、日本においては、カウンセラーの養成やカウンセリングの実践にかかわるさまざまな領域で、スーパービジョンをめぐる誤解や混乱が生じている。先に述べた「スーパービジョンの意義・目的・方法がわからない」「スーパービジョンに抵抗がある」という意見だけでなく、これまでに指導を受けた経験の中で「指導者が一方的に意見を述べ立て、自分の考えや意見を聴いてももらえるような雰囲気ではなかった」とか、「指導者に見立てや手だての不備・不手際をあれこれと指摘され、追い詰められた感じがした」という印象を持った人もあるなど、残念な状況がみられる。

4 カウンセリングを活用する支援者の苦戦と混乱

安定した人間関係を基礎に、主に言語的コミュニケーションを通して心理支援および発達支援を行う専門職、すなわちカウンセリングを活用する支援者の苦戦や混乱には、次の4点があることが指摘できる。

① カウンセリング・スキルが十分に備わっていないために、堂々巡りの苦戦や予期しない中断を余儀なくされたり、クライアントとの関係構築がうまくできずに相談を継続することができない。

② 「クライアントの話を聴いているだけでは問題は解決しない！」などと発言する一方で、カウンセリング・スキルが適切に活用できず、クライアントの話がほとんど聴けていなかったり、本当に「ただ聞いているだけ」であったりする。

③ スーパービジョンを受ける際に、「私のクライアントに対する理解と対応はこれでよかったでしょうか。もし、私の気づいていない問題や反省すべき点があれば、厳しくご指導ください」とか、「これからどのようにカウンセリングを進めていけばよいのか教えてほしい」という依存的な要求が、何のためらいもなく出される。

④ これまでスーパーバイザーになるための訓練を受けていない指導者から、事例検討やコンサルテーション、ケース・カンファレンスや事例指導との区別もなく、混乱したままに「スーパービジョンまがい」の指導を受けてきた。

スーパービジョンとは、カウンセリングを活用して心理支援や発達支援を行う支援者（カウンセラー）が、自らのカウンセリングの能力やスキルを発達させるとともに、これまで依存的に受けてきた指導から脱却して、自らのカウンセラーとしての課題を適切に自己評価し、その課題に主体的に取り組み、解決できるようになること、すなわち、カウンセラーの自律を促すために不可欠な援助活動である。すなわち、スーパービジョンはカウンセラーの発達と自律を促進することを目的としている。

筆者は、カウンセリングを「カウンセリング関係に基づいて、クライアントが自らのクライアントとしての課題に気づき、その課題に主体的に取り組み、解決できるように援助するための継続的な援助関係であり、その過程を通してクライアントとしての発達と自律を促進する活動」と定義し、スーパービジョンを「スーパービジョン関係に基づいて、スーパービジョンを受けるスーパーバイザーが自らのカウンセラーとしての課題を適切に自己評価し、その課題に主体的に取り組み、解決できるように援助するための継続的な援助関係であり、その過程を通してカウンセラーとしての発達と自律を促進する活動である」と定義して、カウンセリングとスーパービジョンが異質同型的（isomorphic）であることを強調する。

5 スーパービジョンの視点を取り入れた2つのカウンセリング・ロールプレイ

スーパービジョンにおいて最も重要な視点は、スーパービジョンを受けるスーパーバイザーが自らのカウンセラーとしての課題を適切に自己評価し、その課題に主体的に取り組み、解決できるように援助することであるため、カウンセラーであるスーパーバイザーが自らの課題を適切に自己評価することが、スーパービジョンの第一歩となる。

そこで考案した方法が、カウンセリングのロールプレイを用いてカウンセリングの課題を明確にする「連続的ロールプレイ」と、カウンセラーがその課題を意識しながら取り組む「立体的ロールプレイ」である。

表1には、連続的ロールプレイと立体的ロールプレイのすすめ方（三川，2024）を整理して示した。

表1 「連続的ロールプレイ」と「立体的ロールプレイ」のすすめ方

第1ステップ：「連続的ロールプレイ」の振り返りを通して、カウンセラー（スーパーバイザー）が、自らの課題に気づくことができるように働きかける。

(1) 「連続的ロールプレイ」では、4人1組になって、ジャンケンをして一番勝った人から時計回りに役割を割り当てる。

(2) 第1組のセッションでは、A（クライアント）に対して、B（カウンセラー）が対面して向き合い、5分間のカウンセリング（ロールプレイ）を行う。

(3) 2人の観察者（C・D）には、クライアント（A）ではなく、カウンセラー（B）に注目するように示唆する。

(4) 5分間のカウンセリング（ロールプレイ）が終了すれば、5分間の振り返りを行うが、最初にクライアント（A）から「カウンセラー（B）に話を聴いてもらえたかどうか？」について発言を求める。

(5) 次に、カウンセラー（B）に、自らの体験とクライアントの意見を受けての振り返りを語ってもらう。

(6) その後に、2人の観察者（C・D）から、気づいたことや感じたことをフィードバックしてもらう。この過程を通して、B（カウンセラー）は、自らのコミュニケーションやカウンセリングにおける課題に気づくことになる。これで第1組のセッションは終了とする。

(7) 続いて、第2組のセッションに移るが、第2組のクライアントは、第1組でカウンセラーを演じたBが担当する。B（クライアント）は自らがカウンセラーとして理解したところから、クライアントとしての発言を始める。つまり、第1組でAが演じたクライアントの役割を引き受け、Aが表現していた思考や感情を踏まえて、B（クライアント）として発言していくことになる。

(8) 第2組では、第1組の観察者であったCが担当し、C（カウンセラー）は、B（カウンセラー）の後を引き継いで、5分間のカウンセリング（ロールプレイ）を行う

(9) 第2組の観察者（D・A）は、第1組と同様に、C（カウンセラー）の言動に注目するように示唆する。

(10) 5分間のカウンセリングが終了した後に5分間の振り返りを行うが、④と同様に、クライアント（B）から「カウンセラー（C）に話を聴いてもらえたかどうか？」について発言を求める。

(11) 次に、カウンセラー（C）に、自らの体験とクライアントの意見を受けての振り返りを語ってもらう

う。

(12) その後に、2人の観察者(D・A)から、気づいたことや感じたことをフィードバックしてもらう。この過程を通して、B(カウンセラー)は、自らのコミュニケーションやカウンセリングにおける課題に気づくことになる。これで第2組のセッションは終了とする。

(13) 同じ要領で、3組目と4組目のセッションを終了した後に、自らのカウンセラーとしての課題を明らかにしながら、ワークシート等に箇条書きで記述する時間を10分間程度とする。

第2ステップ：「立体的ロールプレイ」の振り返りを通して、カウンセラー(スーパーバイザー)が自らの課題に向き合い、取り組んだ成果と課題を自己評価できるように働きかける。

(1) 「立体的ロールプレイ」では、第1ステップの「連続的ロールプレイ」で明らかになった自らの課題を意識しながらロールプレイに取り組む。

(2) ロールプレイのすすめ方は「連続的ロールプレイ」と同じであり、第1組のセッションでは、A(クライアント)に対して、B(カウンセラー)が対面して向き合い、5分間のカウンセリング(ロールプレイ)を行う。

(3) 2人の観察者(C・D)には、クライアント(A)ではなくカウンセラー(B)に注目するように示唆する。

(4) 5分間のカウンセリング(ロールプレイ)が終了すれば、5分間の振り返りを行うが、「立体的ロールプレイ」では、カウンセラー(B)から発言を求める。すなわち、カウンセラーとして、①クライアントをどのように理解して、②クライアントに対して何をしようとしたか、③その際に、自分の課題の影響はどうであったかについて、気づいたことや感じたこと、考えたことなどを報告してもらう。

(5) 次に、カウンセラー(B)による振り返りを受けて、クライアント(A)が自らの体験を振り返り、その内容を意識化して言語化する。

(6) その後で、2人の観察者(C・D)が気づいたことや感じたことをフィードバックするほか、カウンセラー(B)のかかわりについてコメントを提供する。

(7) 同じ要領で、4組のセッションを終了した後に、自らの課題を意識しながら取り組んだカウンセリング(ロールプレイ)の体験について10分間のシェアリングを行う。その中で、カウンセラーとして自らの課題に向き合い、取り組んだ成果と課題が自己評価できるように促す。

*三川(2024)を基に作表した。

表1に示したように、「連続的ロールプレイ」は、想定したクライアントの役割や体験を参加者が引き続いて演じていく点に特徴があり、1回のカウンセリング・ロールプレイの時間は5分間と短い。5分間のカウンセリング・ロールプレイの内容であれば、その振り返りは比較的容易である。そのため、1セッションが15～20分間のカウンセリング・ロールプレイの場合のように初頭効果・親近効果によって最初と最後の一部分しか思い出せないという事態が起きにくい。また、4人1組の「連続的ロールプレイ」では、クライアントの役割や体験を順に引き受けていくことによって、合計で20分間のカウンセリング過程が体験できるというメリットがある。なお、クライアントの提示するテーマ(話題)は、高校受験を目前に控えた中学3年生の「合格できるでしょうか?」や、就職活動に自信をなくした大学4年生の「就職できるでしょうか?」など、カウンセリング・ロールプレイとして実施しやすいテーマを選ぶとよい。

「立体的ロールプレイ」と命名した理由は、カウンセラーが自らの課題を意識しながらカウンセリングのロールプレイに取り組み、その結果に対して振り返りを行うことが、「自らのカウンセ

ラーとしての課題を適切に自己評価し、その課題に主体的に取り組み、解決できるようになる」ことをめざしたスーパービジョンの視点を取り入れたカウンセリング・ロールプレイであることによる。

6 進路指導におけるスーパービジョンの活用－「対話を始める」から

筆者は、リクルート社から3か月に1回刊行され、「高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための進路指導・キャリア教育専門誌」として知られる『Gareer Guidance キャリアガイダンス』の連載「現場の先生のための『進路指導』相談講座－対話を始める」において、高等学校の進路指導担当の教員と「対話」をする機会を得た。

「対話を始める」の第1回の冒頭には、「カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、熟練した指導者と対話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、よりよいカウンセリングのあり方を模索する手法があります」と記され、第2回には、その手法について「『スーパービジョン』という手法。事例をもつカウンセラー（スーパーバイザー）と指導者（スーパーバイザー）で行う」と注釈が付された。すなわち、筆者と高等学校の進路指導担当の教員との「対話」の過程は、スーパービジョンの視点からの筆者の「問いかけ」に対して、それぞれの教員が応答する中で気づきを得ていくプロセスであり、端的に言えばスーパービジョンの展開であったといえることができる。

「対話を始める」の連載は、2023年4月の446号から2025年1月の453号までの間に、「進路指導で悩む場面、ふと立ち止まる瞬間があっても、立場上、なかなか率直に相談できる相手がいない、お困りの先生方」の中から6人の教員に対して、スーパービジョンの視点をもった「対話」を展開したものである。このうちの第1回から第4回までが、高等学校の教員が生徒とどのように向き合っていくかを振り返り、よりよい進路指導のあり方を考えていくスーパービジョンの実際について記述している。第5回の記事は、新しい進路指導の取組を提案したいある教員が、変化を敬遠するベテランの教員から反対意見が返ってくることを想像して尻込みしてしまう自分自身と向き合っていく過程が記述され、教員同士で活用できるアサーションの考え方が紹介されている。第6回の記事では、「三者面談は生徒と保護者の合意形成の場」「教師は正解を示す存在」「何を求めているのか、想像できるようにならなければいけない」「三者面談までに生徒の思いを言語化させなければならない」など、知らず知らずのうちに思考の前提になっている思い込みに気づいていく過程が描き出された後、生徒の心が育つ「聞く力」と気をつけたい態度について述べられている。

実際には、高等学校の教員と筆者とが向き合い、それぞれの教員から進路指導にまつわる問題や課題について語っていただき、その内容について筆者がスーパービジョンの視点から「問いかけ」を行い、それに教員が応答する中でさまざまな「気づき」が生まれていくプロセスを録音した資料を基礎に、記事の担当者からの質疑応答を踏まえてまとめられたものである。

表2は、それぞれの教員が提示されたケースの概要、スーパービジョンの視点からの筆者の「問いかけ」、それに応答する中で得られた教員の「気づき」を掲載された記事の中から抽出して整理したものである。

表2 ケースの概要およびスーパービジョンの視点からの「問いかけ」と「気づき」

第1回 公立高校 進路課 山崎先生（仮名） 40代前半	* Vol.446, Pp.37-39. 2023年4月
【ケースの概要】	
夏を迎えた高3の生徒Aくん。これまでは大学進学を目指していましたが、夏休み前の面談で突然、進路を変更したいと言い出しました。	
高3の生徒Aくん：先生、僕、やりたいことを見つけました。ユーチューバーになります！なので大学進学はどっちでもいいかな～って思うんですけど、どう思いますか？ 今から動画投稿のほうに専念したほうがいいでしょうか？	
山崎先生：ユーチューバー？？？……本気で目指してるんだよね？	
山崎先生の悩み：華やかな世界に憧れる生徒が、毎年います。最近だと声優やお笑いタレントを目指したいという生徒も。もちろん「成功できるかどうかは本人次第」とは思いつつ、私自身、実際にユーチューバーがどのように生計を立てているのかもわからず、自分の知識も意識も追いつかないのが正直なところで。どのような指導がこの生徒にとってより良い人生を歩むことにつながるのか、悩みます。	
◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」	
①なぜ、その生徒さんはユーチューバーになりたいと言い出したのですか？	
②なぜ、山崎先生は、〈過去の卒業生と似た進路を選び、一見「進路に問題がない子」に見える〉生徒たちのことは心配しないのですか？	
③高校を卒業しても一人きりで生きていくわけではないのですよね。	
◆上記の「問いかけ」による先生の気づき	
①「なぜ生徒がそう思った？」を聞き取れていなかったことに気づきました。なぜか生徒が真っ先に「お金」と言ってくるであろうと決めつけていた。でもお金を稼ぐ方法は他にいくらでもある。あえてユーチューバーを挙げたところに、本人のこだわりや思いがあったかもしれません。	
②「普通に進学や就職をしようとしている生徒のことはなぜ心配しないのか」と聞かれて、ハッとしました。その子たちは本当に大丈夫なのか？「問題のない進路」なんてないのですよね。これまで通りであれば安心というパターンに陥っていた。それでは変化に対応できないと気づきました。	
③「生徒は一人きりで生きていくわけではない」という言葉を聞いて、少しホッとするような気持ちになりました。社会に出て、生徒たちが新たな人間関係を築き、その中で支えられて生きていくのだという安心感。目の前の生徒のことばかり考えてしまい、視野が狭くなっていました。	
第2回 私立の中高一貫校 クラス担任 増本先生 50代前半	* Vol.447, Pp.37-39. 2023年7月
【ケースの概要】	
既に卒業している生徒なのですが、今も「もっと良いアドバイスができたのでは」と引きずっている生徒がいます。高3から担任として受け持つことになった、生徒Bさん。4月に面談すると、このように言いました。	
高3の生徒Bさん：やりたいことがないし、勉強する意味もわかりません。でも、とりあえず、大学には行きたいです。親は「有名な大学に進学したほうがいい」と言うのですが…。	
増本先生：興味がある学部もない？…ひとまずあなたが得意な科目を生かして受験できそうな大学を、一緒に選ぼうか。	
増本先生の悩み：何を聞いても「やりたいことはない」と答えた生徒。「今すぐ就職するほどの覚悟はな	

いので大学には行きたい。行ったらなんとかなる気がする」と意志のなさそうな様子を前に、「この状態では、私のひと言が彼女の一生を左右してしまいそうだ」と悩みました。結局、得意な科目を伸ばして受験できる大学をいくつか紹介し、無事に進学したものの、あのとき、もっと良い指導ができたのではと考えてしまいます。

◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」

①卒業後は、その生徒さんはどうされていますか？

②やりたいことが明確にある生徒さんでも、常に「これで良かったのかな」「これから変わることもあるんだろうな」と思案しながら、向き合っているんですね。

◆上記の「問いかけ」による先生の気づき

①卒業後の生徒の様子をもっとわかれば、「これで良かった」「もっとこうすれば良かった」と判断する手があるのだから、と思いました。ただ、常に目の前の生徒で精一杯というのが現状。どのようにして自分の指導に対するフィードバックを得れば良いか…と考えました。

②ほかの生徒について話すつもりはなかったのに、三川先生と対話しているうちにおのずと喋り出していました。「やりたいことが明確にある」生徒に対しても同じように悩んでいる、と指摘されて、「これで良かったのかな」と心配に思う生徒が、ほかにもたくさんいることに気づきました。

③もっと良い指導、良いアドバイスがあったのでは、と悩んでいましたが、三川先生に問われて、今の自分の関わり方に問題があるわけではない、と自然と思えました。「マイナスな経験というものはない。すべてが今につながっている」と自分自身が考えていることに気づきました。

第3回 県立高校 教務主任 櫻井先生（仮名） 40代前半

*Vol.448, Pp.37-39. 2023年10月

【ケースの概要】

本校には以前から、教員を志望する生徒が多くいます。ただ近年、職業選択で働き方やワークライフバランスを重視する風潮もあってか、教員を志望する生徒や保護者からこんな相談を受けることが増えました。

高3の生徒Cさん：学校の先生になりたいのですが、よく「忙しい仕事で、“ブラック”だという人もいます」と聞くので、どうすべきか悩んでいます。親からも「大変な仕事だから、やめたほうがいい」と言われて…。

櫻井先生：…「ブラック」感じている人も、そうとは思っていない人もいますので、一概には言えないのだけ…。

櫻井先生の悩み：私自身は自分の働き方を「ブラック」とは思いません。ただ職場環境をどのように捉えるかは、赴任先の環境や本人の主観によるところが大きく、どうとも言い難いのが正直なところ。ニュースなどで教員の働き方が問題視されることも増え、保護者から「本人は教員になりたがっているが、心配だ」という相談を受けることも。私が安易に、教員の魅力ややりがいを伝えてはならないような気がしてしまいます。

◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」

①ユーチューバーを目指す生徒にはリスクを伝えた上で応援されているのに、教員を目指す生徒に対してだけ悩まれているのは少し違和感がありますが、いかがですか？

②昨今、働き方改革が叫ばれていますが、それは「働く時間をいかに少なくするか」という問題だけでは必ずしもない、ということですね。それぞれが自らの裁量で主体的に仕事に取り組める。そんな「意識改革」も必要、とお考えなのでしょう。

③保護者が子どもの成長を信じられていないとしたら、足りないのは何でしょうか。

◆上記の「問いかけ」による先生の気づき

①不確実な面を持つ職業は教員だけではないのに、教員を特別視していることに気づきました。自分の仕事だからこそ、生々しい面も見ているだけに「うかつに背中を押してはいけない」と躊躇していたのかも知れません。でも、ほかの職業にも、就いた人にしかわからない苦労はあるはず。

②教員の仕事といえば教科指導・部活指導だった世代には、「新しい仕事が増えてブラックになった」と見る人もいます。でも新しい教育を受けて育った今の高校生が働くころには、意識が変わっているはず。今は過渡期で、これから教員の仕事内容や、働き方への評価が変わるかもしれません。

③保護者と生徒の対話が大事だとわかりつつも、どこかで「家庭の問題だからどうしようもない」と思おうとしていたところがありました。三川先生とお話ししながら、三者面談の前に「親御さんとこんな話をしてみても」と声をかけるなど、教員にも対話を促すことはできると感じました。

第4回 公立の中高一貫校 クラス担任 大浦先生（仮名） 50代前半 *Vol.449, Pp.35-37. 2024年1月
【ケースの概要】

変化の激しい時代。これから社会に出ていく生徒たちには、受け身ではなくみずから考え、動き、仕事を創り出していくような思考力や主体性が必要だと考えています。しかし、進路選択の時点から自分で考えようとせず「親に言われるがまま」の生徒がいて…。

高3の生徒Dさん：両親が共に公務員なのですが、親から「公務員になったほうがいい」と言われたので、そうします。親が大学・学部についても調べてくれて、志望理由書と一緒に書いてくれるそうです。

大浦先生：…あなたはそれでいいの？ 本当は自分の興味関心や適性をふまえて、進学先も仕事も考えてほしいのだけど…。

大浦先生の悩み：担任の私には「その学部での学びにも興味がなさそうだし、本人の適性がまったく考慮されていない」というように見えて心配になりました。自分と同じ職業になった方がいいと押し付けてしまう保護者、深く考えずに言う通りにしてしまう生徒、どちらにも問題がありますが、同時に教員である私たちも、従来型の進路指導から脱却できておらず、受け身で無難な生き方を誘導しているのではないかと悩ましく思っています。

◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」

①大浦先生自身が、そのときの進路指導を振り返って「もっとこうしたかった」と思うことはありますか。

②一方通行のメッセージに見えて、その共有は先生と生徒との「対話」になっているのではないですか？

◆上記の「問いかけ」による先生の気づき

①このころ、ちょうどコロナ禍ということもあって、進路指導にかけられる時間に限りがありました。さらに年々教師のやるが増えており、生徒一人ひとりともっと時間をかけて話せれば、より良い進路選択につながるはずなのに…と不満が溜まっていることに気づきました。

②少しでも生徒たちの視野を広げたい思いでニュースを共有してきたのですが、それも生徒との「対話」なのだと気づきました。実際、生徒が「あのニュース、考えさせられました」などと応じてくれると私も嬉しいです。時間が限られているなかでも、できることはある、と思えました。

③いろんな生徒の話をしているうちに、みずから深く考えて、進路を決めていく生徒たちにはどんな共通点があるか、私なりの考えが言語化できました。視野を広げて、社会で起きている出来事や課題に目が向くと、自分と社会との「つながり方」を考えるようになっていくのだらうと。

第5回 公立高校 羽村先生（仮名） 30代後半 *Vol.450, Pp.43-45. 2024年4月
【ケースの概要】

新しい進路指導の取組を提案したいのですが、「変化を敬遠する先生方から否定されるのでは」と想像してしまい、つい言葉をのみこんでしまいます。

羽村先生の悩み：社会の変化を日々感じており、時代に即した進路指導に変えていくべきだと考えています。しかし、なかには変化を敬遠する先生方も…。「新たな提案をしても拒絶されるのでは。それなら例年通りの取組をしたほうが、ストレスなく過ごせる」と考えてしまう自分を何とかしたいです。

◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」

①その相手ですが、どなたに対してもご自分の考えを述べるのに抵抗があるのでしょうか？

②自分はこうしたいという思いを伝えて、たとえその瞬間には受け入れられなかったとしても、それで終わりではない。自分の思いを諦める必要がないということを、しっかり生徒さんと対話されてきたのですね。

③もし今、羽村先生の提案に対して「それに何の意味があるのか」と聞かれたら、どのように答えますか？

◆上記の「問いかけ」による先生の気づき

①…ああ、そう言われると、生徒に対しては率直に、自分の考えを伝えていきますね。

②そうですね。…いやあ、今、話していて気づきました。私は生徒には「うまくいなくても自分の思いをしっかり表現して、挑戦すべき」と言っているのに、自分自身では、できていなかったですね。

③…少なくとも「僕は意味があると思っています」とは言うかもしれません。

第6回 公立高校 澤口先生(仮名) 40代前半

*Vol.452, Pp.39-41. 2024年10月

【ケースの概要】

三者面談を通じて、生徒と保護者の合意形成をするのが年々難しくなっています。面談の前に、生徒の本音や思いをうまく引き出し、言語化させたいのですが…。

澤口先生の悩み：生徒と保護者の間で進路観のギャップが年々広がっており、最近、三者面談をうまく成立させるのが難しくなっています。私としては、できるだけ生徒の進路選択を応援してあげたいです。保護者に対して、生徒が思いをしっかりと伝えられるよう、言語化の支援が必要だと考えています。

◆スーパービジョンの視点からの「問いかけ」

①澤口先生は、三者面談では最終的に、生徒と保護者の意見を一致させなければいけない、とお考えなのでしょうが？

②なぜ(三者面談の場に)「何を求めているか」を直接聞いてはいけないのでしょうか。

③ひょっとしたら三者面談というのは初めて親子が向き合う、絶好のチャンスかもしれませんね。そうは言っても先生方は、最終的には具体的な進路の話につなげなければいけない、というお立場でしょうか。

◆上記の「問いかけ」による先生の気づき

①確かに誰から「三者面談では、生徒と保護者の意見を一致させなさい」と指導されたことはないですね。でも教員としては、それを求められているというように感じていました。

②なぜ聞けないのかな…。自分のプライドがあるのかも…。また、周りのベテランの先生方から「1を聞いて10を想像できるような力を身につけなさい」と言われてきたことも影響していると思います。

③いえ、それ以前に、生徒に対しても保護者に対しても「聞く」ということができていないと感じました。少し話を聞いただけで、勝手に私が生徒の気持ちを想像し、頭の中でストーリーを作っていたところもあるかもしれません。

④思えば私には「三者面談で『結果』を出さなければいけない」という使命感があったのかもしれませんが。それこそが担任の腕の見せ所だと。そうではなく、三者面談をきっかけに考えを深めていけばよいのだと、対話を通じて考えが大きく変わりました。

最終回の第7回(vol.453, Pp.35-37. 2025年1月)では、筆者へのインタビューをもとに記事がまとめられているが、その中に、「日々の進路指導を振り返り、指導者自身の課題に気づく『セルフスーパービジョン』のすすめ」をテーマに、「どう指導すべきかの正解を求める依存的な態度から脱却して、自らの指導者としての課題を適切に自己評価し、その課題に取り組むこと—まさにこれがスーパービジョンのプロセスです。その最終目標はスーパーバイザーという外側の存在なしでも、自分で自分に気づきを促すような問いを発したり、どうやって乗り越えていこうかと自分で考

えたりできること。つまり自己対話によって自分自身にスーパービジョンができるようになることなのです」と、スーパービジョンの本質を表現した記述がある。この内容は、平木（1997）が、スーパービジョンに内在する普遍性として、スーパービジョンの目的は、スーパーバイザー自身が頼れる内的スーパーバイザーを自己内に育てることであると述べていることに通じる。

また、石隈（1999）は、援助者自身の価値観や考え方、感情、問題のとらえ方などが子どもへの支援に影響を与えるとして、教師やカウンセラーは自分自身についてのアセスメントを行う必要があると指摘したが、第7回では、エリス（Albert Ellis）の論理情動療法の視点から、援助者としての立場で進路指導を行う教員が陥りやすい「非合理的な思い込み」（イラショナル・ビリーフ）が取り上げられ、教員自身の価値観や指導のあり方について日頃から自己点検することが生徒への向き合い方につながっていくことを示唆して、表3に示した8項目がチェックリストとしてまとめられている。

表3 進路指導を担当する教員が陥りやすい非合理的な思い込み（イラショナル・ビリーフ） チェックリスト

- 1 自己理解がないと先には進めない？
- 2 目標がしっかり定まらないうと、何もできない？
- 3 自分のしたいことすらわからない生徒には、進路指導はできない？
- 4 進路意識がはっきりしないまま進路決定すると、あとで必ず後悔する？
- 5 生徒の自主性・主体性を尊重すると、収集がつかなくなり、とんでもないことになる？
- 6 教師は生徒の将来の成功を、確実に保証してやらねばならない？
- 7 生徒は未熟で社会のことを知らないのだから、教師がしっかりと指導すべきである？
- 8 生徒を自立させるためには、あまり教師が手をかけたり、援助してあげるのはよくない？

*Career Guidance（キャリアガイダンス）Vol.453, p.36.（2025年1月）より引用

このほか、第7回では、先行きを見通し「できなかったこと」を改善していくPDCAサイクルに代わって、「できたこと」に注目し、成り行きを振り返りながら少しずつ願いに近づくDDRRRサイクルについても言及しており、Desire（「こうありたい」という願いや望み）、Do（取り組む／やってみる）、Reflect（これまでの過程を振り返る）、Reframe（「できたこと」を思い返し）、Realize（ありたい姿に近づいていることを実感する）について紹介されている。進路指導という教育実践においては、一人ひとりの生徒と向き合い、生徒の発達と自律に向けて対話を重ねていく中で、これまでの成行きを振り返り、その過程において「できたこと」を思い返し、自らの発達と自律を実感できるように援助することが重要であることをあらためて確認しておきたい。

【引用文献】

- 平木典子（2017）. 増補改訂 心理臨床スーパーヴィジョン—学派を超えた統合モデル 金剛出版
 石隈利紀（1999）. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房

三川俊樹（2022）. キャリア発達を促すキャリア教育の推進に向けてーキャリア・カウンセリングを基礎にしたキャリア・パスポートの活用 追手門学院一貫連携教育研究所紀要, 8, 57-81.

三川俊樹（2024）. スーパービジョンとメンタリングの構造に関する一考察（4）追手門学院大学心理学部紀要, 18, 15-31.

文部科学省（2022）. 生徒指導提要（改訂版）

(https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf 2025年1月10日閲覧)

【出典】

現場の先生のための「進路指導」相談講座ー対話を始める Career Guidance キャリアガイダンス, 446号（Pp.37-39）, 447号（Pp.37-39）, 448号（Pp.37-39）, 449号（Pp.35-37）, 450号（Pp.43-45）, 452号（Pp.39-41）, 453号（Pp.35-37）, リクルート.

【謝辞】

- 1）本論考の「6 進路指導におけるスーパービジョンの活用ー『対話を始める』から」は、リクルート社が発行する『Career Guidance キャリアガイダンス』（2023年4月の446号～2025年1月の453号）のうち7回にわたって連載された「対話を始める」の記事に基づいて記述した。本連載の企画を推進された編集顧問の角田浩子氏、その後を引き継がれた市村珠里氏、そして毎回の取材と執筆に尽力され、スーパービジョンの実際を的確に表現していただいた塚田智恵美氏と、取材にご協力下さった6名の高等学校の先生方に心から感謝いたします。
- 2）本論考で取り上げた「スーパービジョン」については、JSPS 科学研究費補助金（科研費）20K03350（研究課題名：キャリアコンサルティングにおけるスーパービジョン・メンタリングのモデル構築）の助成を受けた研究の成果に基づくものである。